

## Ring Around a Tree

正会員 手塚 貴晴 君

正会員 手塚 由比 君

正会員 大野 博史 君

台風によって大きく傾きながら枯れることを免れて成長したケヤキは、その形態が幸いして、これまでも格好の遊び場として園児に親しまれていた。その敷地の一面に、巨木を取り巻くように既存の幼稚園のアネックスとして構築された小規模な建築作品が、この Ring Around a Tree である。機能でいうならば、2層で構成された英語教室と送迎バスの待合い空間なのだが、安易な類型をすることは不可能な空間が具現化されている。

設計上の配慮として特筆されるのは、ケヤキの根を傷めぬよう鋼管杭と木杭で浮かせた基礎構造、部材寸法は座屈を避ける最小限に抑えつつ水平力を受け持つフィーデンディール構造が採用された鉄骨躯体、それでもリジッドな躯体に付け加えられた手すりとも転落防止柵ともつかないロープ張りという素材を活かした材料選定、そして何よりも、幼児にしか活用できない慎重な寸法決定がなされている点などである。これらが、不定型なドーナツ状に構成され、ガラスで覆われている。

これによって、以下のような極めて魅力的な空間が実現している。

まず、園児たちの無垢な内発性からでる多様な行為の可能性を誘発する（アフォーダブルな）場が創出されている点である。囲われた空間によって行為を成立させるのではなく、構造体そのものとの関わりが不可分であり、使う／使われるという主客をこえた相互関係を生み出しているからではないだろうか。かつて、子どもの成長を記した大黒柱や、滑り台にもなった木造校舎の階段手すりのように、建物と直接に呼応し合う関係性の新しいかたちが示されているように思われる。スケール感も含めて、本当の意味での子どもの視線からの空間構成による計画がなされているためでもあろう。半屋外部分だけでなく英語教室においても、外周部に配置された棚状のデッキでは、子どもたちは寝そべて学んでおり、実に快適そうな空間ではあるが、決して大人の体型になるとこのように過ごすことはできないのである。

また、単に生態系への配慮にとどまらない自然環境とアクティビティとの親密な関係性が提示されている点も指摘できる。Ring Around a Tree という作品名称が示すように、中心に伸びるケヤキはあくまでそのよりどころではあろうが、いわゆるツリーハウスになぞらえられるような樹木に対して構築物が一方的に従属的なのではなく、相互が自由な関係としてとらえることができるアモルファスな場、すなわち、主従が渾然となるような空間が実現しているといえる。

管理主義を徹底的に排除しようとする建築主との協同が、かくなる建築作品を生み出す大きな促進の要件でもあったと考えられるが、これに応えた設計手腕は大変に優れたものである。構築することによって、主客・主従の関係性を転換し、行為の自由度をむしろ高めるといった点においては、子どものための空間計画を超えて、極めて高く評価することができる。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。